第39回 全国学童保育指導員学校 東北会場を開催しました

真田 祐
全国学童保育連絡協議会 事務局次長

二〇一四年六月二二日、全国学童保育連絡協議会（以下、全国連協）主催の全国指導員学校東北会場が、仙台市内の宮城学院女子大学で開催され、約五七〇名が参加しました。全国指導員学校東北会場は、東日本大震災以降、四回目となりました。学童保育・指導員の役割を確かめあい、子どもと、働きながら子育てをする保護者をどのように支えていくのか。これは、被災した地域のみならず、すべての学童保育にとっての本質的な課題であり、この課題にしっかりと向きあい、学びあうことが求められます。そしてそのためにも、子どもとその家庭を守り、支えるために、日々懸命に働いている指導員を支えていくことは、支援の大きな課題です（今年も、大きな被害を受けた地域の学童保育の指導員への参加費支援、交通支援を行いました）。

午前の全体講演では、「いま、子どもの生活と育ちを支え、親の暮らしを支える学童保育をともに創る」と題して田中孝彦先生（武庫川女子大学教授）にご講演いただきました。

本誌にこれまで掲載された「東日本大震災　学童保育の一日も早い復旧・復興を願って」（二〇一四年七月号までで三五回）にすべて目を通されたうえで講義に臨まれた田中先生は、『災害は人々を分断する』という困難な現実に人々が直面したこと」「学童保育が抱えていた問題が震災によって顕在化するなかで『子どもの生命と生活を守る』ために指導員や関係者が行ってきた努力や模索、そのなかでの子ども理解の深まり」と「学童保育の役割の持つ意義の再発見があったこと」。そして、「全国各地の学童保育関係者が、『息の長い支援』に取り組んできたことの意義」「そのことが学童保育の新たな社会的需要の高まりを創っていること」などについて語られました。また、被災した地域の学童保育への支援の事例をとりあげて、『指導員が困難や不安を語り、聞き取られる機会』をつくり、ともに実践の困難と模索を語りあうことに支えられた」との声を紹介し、今後の支援や研修のあり方について問いかけました。

午後からは、一〇の講座にわかれ、子どもと保護者を支える学童保育・指導員の役割をたしかめ、大切にしたい生活内容や指導員の関わりを学びあいました。そのいくつかを紹介します。

「学童保育の生活づくりとおやつ」の講座では、平本福子先生（宮城学院女子大学教授）がワークショップを行い、学童保育におけるおやつの意味と、その意義を学びあいました。「障害児とともに育ちあうための生活づくり――発達障害児の理解と援助を中心に」の講座では、松浦淳先生（青森中央短期大学教授）が講義を行い、生活づくりで大切にしたいことを学びあいました。「特別講座」では、「被災した子どもの心の理解と心のケア」をテーマに、宮城県内で心のケアの活動に取り組まれている畑山みさ子先生（ケア宮城）が講義を行いました。「子どもの心・育ちを深くとらえる」の講座では、被災した地域での子育て支援の課題に取り組んでおられる足立智昭先生（宮城学院女子大学教授）が講義を行いました。また「特設交流」の講座では、「子どもの安全を考える」をテーマに、震災後の各地の取り組みを交流しました。

参加した指導員からは、つぎのような感想が寄せられています。

「震災後の子どもたちはまだまだ心にある傷が多く、指導員に自分のそばにいてもらいたいという気持ちをぶつけてきます。なるべくその子どものそばに寄り添うようにしていますが、十分なことはできていないと感じます。先生の話を聞いて、もっとカンファレンスの時間を持ち、子どもに対しても保護者に対しても寄り添っていけるようになりたいと思いました」

＊　＊　＊

準備段階から当日まで、東北各地の県連協および、宮城県学童保育緊急支援プロジェクトがつながりを築いてきた多くの方々が運営に携わり、参加者が気持ちよく学び、交流することができたという声が多数寄せられました。また、会場となった宮城学院女子大学には、今年も準備・運営・会場整備など、多大なご協力をいただきました。あらためて御礼申し上げます。